

論文

オートポイエティック・システムとしてのマスメディア —ニクラス・ルーマン『マスメディアのリアリティ』を読む—

馬場 靖雄

本稿では、ニクラス・ルーマンの社会システム理論に依拠して、マスメディアを「機能分化した（自己言及的に閉じられた、オートポイエティックな）コミュニケーション・システム」として捉える。そしてこの理論を用いて、ITの急速な進展・普及によって変貌しつつあると言われるマスメディアの現状を記述しつつ、直面する問題点と課題を分析する。この理論は、マスメディアの自律性を過度に強調し、マスメディアと社会（全体社会 Gesellschaft）とのつながりを無視して前者の社会的責任を免除するものだとして、しばしば批判されている。しかしルーマンのマスメディア論は、ITの進展・普及によって明らかになりつつある、マスメディア・システムに内在する偶発性・不確定性を理論的に指摘しているという点で、むしろ「先進的」なのである。

キーワード：マスメディア、コミュニケーション、機能分化、自律性、閉鎖性

1. マスメディア論の位置と意義

ニクラス・ルーマンは近代社会を、機能的に分化し閉じられた、作動の上で（つまり、因果的に＝情報とエネルギーに関してではないが、諸要素の参照関係において）環境から独立した諸システムからなる、中心も頂点も持たないひとつのシステムとして捉えている。そしてマスメディアも、そのような機能分化した諸システムのひとつとして位置づけられている。本稿の目的は、近年の急速なメディア環境の変化（情報化の全面的進展）をも念頭に置きつつ、ルーマンのこのマスメディア論の射程を明らかにすることにある。

この議論によって第一に、メディア環境の変化が本格的に生じる直前に逝去したルーマンの理論が、この変化に対応するものであったかどうかを見極めることができる。また第二に、件の変化によって近代社会は新たな段階に突入した云々という議論の妥当性を、ルーマンの立場から見極めることもできよう。変化を強調する議論では、次のように主張される。近代社会は、グローバリゼーションの進行と情報化の加速により、諸領域の分離線（空間的国境および、機能領域間の抽象的な分離線）が溶解し、複雑性と流動性を増した新たな段階に突入した、もはやこの新局面を機能分化という観点によって捉えることはできない云々。ITの普及に伴うマスメディアの変容は、この変化を象徴すると同時に、変化そのものの主要動因の一つと見なされることも多い。このような変化を視野に収めること

をせず、「近代社会＝機能分化社会」というテーゼに固執するルーマン理論は、もはや時代遅れではないのだろうか？

2. 予備的概念整理：三つのメディア理論

1984年に社会システム論の「グルントリス（要綱）」である『社会システム』（Luhmann 1984 = 2020）が刊行されて以降の、「オートポイエーシス」（システムの自己創出）概念の導入、いわゆる「オートポイエティック・ターン」以降のルーマン理論においては「メディア」という概念が三つの文脈で登場してくる。

第一は「理解のメディア／流布メディア／動機づけメディア」という概念系列。これはコミュニケーションにおける三つの困難（＝蓋然性の低さ *Unwahrscheinlichkeit*）、すなわち理解の困難、到達の困難、受け入れの困難に対応し、それぞれの困難を克服することによってコミュニケーションが生起する蓋然性を高める機構として位置づけられている。それぞれのメディアを「これである」というように排他的に名指すことはできないが（その理由についてはすぐ後で述べる）、とりあえず言語、活版印刷術、象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアがそれぞれに相当する。最後の項目の具体例としては、貨幣、権力、真理、愛を挙げておこう。なおこの概念系列は、『社会の社会』（Luhmann 1997 = 2009）の段階では「流布メディア」と「成果メディア」に整理し直されている。

第二は「後期」の理論体系において重要性を増していく、社会心理学者フリッツ・ハイダー由来の「メディア／形式」という区別を枠組みとするメディア概念。そして第三が、機能分化したシステムとしての「マスメディア」という脈絡における「メディア」である。

この三者の関係についてはさまざまな評価が可能である。第一のメディア概念に第二のそれが言わば接ぎ木されるかたちで導入されたため、一貫性が欠如するに至っているという解釈も成り立つ。しかしここでは、「ルーマン後期において採用された諸概念は、前期から一貫して呈示されている発想をより明確にするために導入された」という仮定に基づいて理解することにしよう¹⁾。つまり第一（および第三）の系列は、第二を踏まえることによってより明確に再構成されうる、と。

第二の系列における「メディア」は、「諸要素のルースなカップリング」として、形式はそれに対して「タイトなカップリング」として定義される。両者は、「ルースである／タイトである」という差異においてのみ現れてるのであって、それぞれ単独で「これはルースである」ないし「それはタイトである」と判定されうるわけではない。これはすなわち、或る事柄を単独で取り上げて「これはメディアであるか否か」を判定できはしないということの意味している。メディアは常に、一段「上」のレイヤーである特定の形式に対してのみメディアなのである。例えば語は、多様な仕方で結合されうるという点でルースにカップリングされている。だから語それ自体としては、有意味な結合をもそうでない結合（統合失調症における「連合弛緩」による発話など）をも許容するのである。この意味で語はメディアである。それに対して文は文法規則や文体上の様式に従って語を結合することによって形成されねばならず、したがって語のカップリングは制限されておりタイトである。この場合文は、語というメディアによって形成される形式となる。

ただし文法上正しい文であっても、その発話がなされる当該領域の規則や慣習に従って結合されな

ければ、意味ある「作品」（小説、エッセイ、論文、著作など）にはならない。

……特定のシステムにおいて考慮されねばならない、テーマ交替の制限が、あるいは表現形式の制限も、生じてくる。学位論文で《「この論文で批判されている議論は」すべて戯言（たわごと）である》といった言明に出会うことは普通はない。

(Luhmann 1984, 200-201 = 2020, 上197)

すなわち文そのものが許容するカップリングは、実際に特定の言説ジャンルとして通用しうるカップリングよりも広大なのであり、つまりはカップリングがルースなのである。「文のルースなカップリング可能性／特定ジャンルの「作品」のタイトなカップリング条件」という区別においては、文がメディアであり作品が形式となる。

したがって、「語はメディアか否か」と問うのは誤っている。問われるべきは、「語がメディアとして働くのはどんな形式にとってなのか」、あるいは「作品という形式を可能にするのはどんなメディアなのか」である。要するに、「メディア／形式」は、ひとつの差異ないし区別として、スペンサー・ブラウンの用語法に従えば(Spencer-Brown 1969 = 1987)、形式として(!)のみ登場してくるのであって、両項目を切り離してそれぞれとして規定することはできないのである。

同じことが、「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア symbolisch generalisierte Kommunikationsmedien」(以下「SGKM」)についても言える。SGKMの例としてあげられるのは、貨幣、権力、真理、愛などである。ルーマンがそれらメディアについて論じる場合、例えば権力論において主題となるのは、「権力はいかにして可能になるか」「人はなぜ権力に服従するのか」といった設問ではない。「権力が通用する」(権力はさまざまなかたちで支配／服従関係を組織しうる＝ルースにカップリングされる)と想定される場合に、その想定を前提にしてどんな個別なコミュニケーション連鎖(＝タイトなカップリング)が可能になるか、そしてその連鎖がどんなリスクを孕んでおり、いかに脆いものであるかが論じられているのである。「なぜ通用するか」は、当事者(権力保持者と服従者双方—しかしどちらか一方のみであってもよい)の想定に委ねておけばよい。伝統的な「権力保持者が物理的実力を発動しうるがゆえに」という説明は、その種の想定の一部である。実際には、少なくとも現代社会における巨大な官僚機構を介した暴力行使の場合には、逆に権力(の想定)こそが実力行使の前提となっているのである(前者がメディアであり、後者は形式である)。

貨幣や真理や愛の場合でも同様である。愛においてはこの事態はことに明白になる。愛によって特定の親密関係が(タイトなカップリング＝形式が)可能になるのであって、何かによって愛が可能になるわけではない。もちろん愛を、例えば純粋な心理的メカニズムによって、あるいは「利己的な遺伝子」が仕掛ける畏として、説明することも可能ではある。しかしその時愛は、一段「下」のレイヤーに位置するメディアによって可能になる形式として扱われていることになり、もはやメディアではなくなっている。メディアとは常に、「説明するもの」であって「説明されるもの」ではないのである。

われわれは以上のような観点から、第一の系列と第二の系列のメディア概念は同一であると判断する。そして第三の系列における「メディア」も、やはり同じ観点から捉えられうると考える。要するにルーマンにおける「メディア」概念は、「オートポイエティック・ターン」の前後を通して統一的に構想されていると想定するのである。

以上を本稿の出発点＝前提として措定しておきたい。

3. 『マスメディアのリアリティ』の構成

ルーマンのマスメディア論として刊行された唯一の著作である『マスメディアのリアリティ』(Luhmann 1996 = 2005, 以下「本書」)は大きく三つの部分に分かれている。第一部は第一章から第四章までで、システムとしてのマスメディアの全般的な特質、特にこのシステム特有のコード(そのシステム内でのコミュニケーションすべての前提となる独自の二分図式)である「情報/非情報」について論じられる。この固有のコードに基づいて互いに参照し合う諸要素からなる、閉じられたシステムが「オートポイエティック・システム」と呼ばれる。すなわちルーマンの構想においてはマスメディアは、経済、政治、法、科学などと並ぶ、機能分化したオートポイエティック・システムなのである。

第二部は第五章から第八章までで、このコードの二つの値(情報か非情報か)を割り振るプログラムが、報道/広告/エンターテインメント(以下、「エンタメ」という個別領域ごと)にいかなるかたちを取るかについての詳論。そして第九章以下が、マスメディアと全体社会との関係、マスメディアが社会に与える影響についての議論となっている。管見では同書をめぐる多くの議論は、第一部をざっとフォローした上で第三部の議論に集中する、という体裁を採っているようだ。同書邦訳の「訳者解題」でも、ルーマンのマスメディア論をめぐってドイツのマスメディアないしジャーナリズム研究者の間で生じた論争が紹介されているが、それは(1)マスメディア・システムの規定における技術の位置、(2)ルーマンが提起する「公共圏」概念の意義と問題点、(3)マスメディア・システムの全体社会の中での意義。すなわち、マスメディアは機能分化したシステムに過ぎないのか、他の諸機能システムとは異なる、ある種特権的な性格を持つのか否か(我が国では例えば西垣通(西垣 2004)や大黒岳彦(大黒 2006)は持つと主張している)。以上の三点に集約されている。(1)は第一部(のごく一部)、(2)と(3)は第三部に相当する。つまり邦訳を含めて一般には同書読解の重点は、第三部に置かれているのである。それらが従来のマスメディア研究とも重なるテーマであるという点も、このような論じられ方を誘発しているのかもしれない。しかし第三部の議論は、特に第一部・第二部の詳細な議論の運びに比べると、いわゆる「現代社会論」風のかかなり大雑把な論述に終始しており、ルーマンが築き上げてきた概念装置を通せばなるほどそう見えるのかと納得させられる部分もあるとはいえ、全体としてはさほど生産的なものとは言えない。公共圏を「社会内環境」として位置づけるという議論も、「ルーマンの公共性理論」ということで、ハーバーマスと対比させるというように扱う上ではアプローチしやすいテーマなのかもしれないが、基本的には同様である。

そこで本稿では、特に本書第一部を中心に読解作業を行うかたちで、「マスメディアはどのような点において機能分化した、オートポイエティックなシステムなのか」に関する議論を進めていくことにしたい。その際、本書の論述の細部をルーマンの他の諸著作と照合することを通して、ルーマンがマスメディアをどう見ているかを明らかにするよう試みる(本書邦訳者はこの作業を疎かにしているように思われる)。そうすることが結局は、第三部の「現代社会論」を直接参照する以上に、マスメディアの現状と直面する問題について考えるための示唆を得る結果にもなるはずである——この作業は別項

に委ねねばならないが。

4. マスメディアの定義

まずは改めて第一部に依拠しつつ、マスメディアの規定から始めるとしよう。

以下ではマスメディアの概念によって、コミュニケーションを流布するために複製の技術的手段を用いる、全体社会の諸機構すべてを捉えることにする。(Luhmann 1996, 10=2005, 8, 訳文馬場)

一見したところこれは、伝統的な議論（一から多への発信）とも重なりあう明瞭な定義であり、日常的な経験とも合致するように見える²⁾。しかしその分だけ、この定義の内実を、ルーマンの理論「体系」の他の箇所と照合させつつ理解するという作業が疎かにされる結果をも招来しかねない。例えば本書「訳者解題」によれば、ルーマンに従えばマスメディア・システムは他の機能システムの場合とは異なって、コード（ここでは、「情報/非情報」）だけでは環境から分化しきれず、技術による明確化を必要とするとされている、その点でルーマンのマスメディア論には「根本的問題があることが指摘されている」、ということになる(Luhmann 1996=2005, 186)。

というよりもそもそも訳者は、「マスメディアは複製の技術的手段の使用によって規定される」という論点を、あまり真剣に受け取ってはいないようだ。だからこそ、

……コミュニケーションが行われる公的なオープンスペースも〔マスメディアの概念には〕ふさわしくない。つまり講演会や演劇の上演、展示会、コンサート、そしてそうしたものをフィルムやディスクで広めることも、この概念には含まれない。(8頁)

という、明らかに矛盾する訳文が作成されているのだろう。「フィルムやディスクで広めること」が「複製の技術的手段を用いる」ことに含まれないなどと、どうして言えるのだろうか。

実はこの部分、構文の単純な取り違えからくる誤訳である。原文は以下の通り。

und ebensowenig [genügt] die öffentliche Zugänglichkeit des Raumes, in dem die Kommunikation stattfindet — also nicht: Vorträge, Theateraufführungen, Ausstellungen, Konzerte, wohl aber eine Verbreitung solcher Aufführungen über Filme oder Disketten, (S.11)

A ist nicht X, wohl aber B (AはXでないが、BはXである)を、「AはXでない、同様にBもXでない」(ここでは、Aが「講演会」等、Bが「フィルムやディスクで広めること、Xが「マスメディア」に相当する)と読んだのだろう。英訳(*The Reality of the Mass Media*, Translated by Kathleen Cross, polity Press, 2007)を見ても文意は明らかである。

not public lectures, theatrical productions, exhibitions, or concerts, though the term does include the circulation

of such performances via film or diskette. (p.2)

(筆者試訳) 公開常演、演劇の上演、展覧会、コンサートはそうでは [=マスメディアでは] はない。しかしこの [マスメディアという] 術語は、その種のパフォーマンスがフィルムやディスクによって流通することを含んでいるのである。

このような混乱の背景となっているのは、「複製の技術的手段の使用がマスメディアの分出を可能にする」との議論の理路が理解されていないという事態だろう。この点に関しては、コミュニケーション一般に関するルーマンの論述を踏まえての補足が必要となる。

以下では、全体社会内部でのマスメディア・システムの分出において複製技術が担う役割と、コミュニケーション・システム一般が(物理的・有機的・心理的過程から)分出する上で言語が果たす役割とを並行して捉えうるという観点の下で、議論を進めていく³⁾。

周知のようにルーマンにおいては、コミュニケーションは「情報/伝達/理解」という三極の選択の総合として定義されている(Luhmann 1984, 191- = 2020, 上 187-)。この定義によって何が意味されているかを把握するためには、「コミュニケーションが何でないか」のほうから考える必要がある。

私は対面状況で相手と話している。相手の頬に小さな痙攣が生じる。私は、これはいわゆる片側顔面痙攣であり、相手の身体に生じている神経障害に由来しているのだと考える。この場合、痙攣は何らコミュニケーションではなく、せいぜい他の何事か(神経障害)を示す記号にすぎない。

観察された行動が単に何か別のものを表す記号として把握される場合には、コミュニケーションは生じていないことになる。急ぎ足はこの意味で、急いでいることを表す記号なのかもしれない。それは、黒い雲が雨を示す記号であるのと同じである。しかしまた、急いでいると見せつけているのかもしれない。忙しいと、話しかけると、アピールしているとも受け取れるのである。その種の解釈を誘発するという意図だけのために行われているということもあるだろう。【これらの場合にはコミュニケーションが生じていることになる】(Luhmann 1984, 208-209 = 2020, 上 205)

記号の場合、考慮されるべきは、「これは何を指し示す情報なのか」だけであって、伝達については、つまりいかなる目的、意図、文脈においてそれが為されたのかは、考える必要がない。しかし痙攣や急ぎ足を何らかの伝達意図の表明として受け取る場合には、それはコミュニケーションとなる(この場合の「意図」は、無意識的なものであってもよい)。このように出来事を「情報/伝達」の差異によって受け取る場合に(この選択が「理解」と呼ばれる⁴⁾)、そこにはコミュニケーションが成立しているのである。

この意味でのコミュニケーションの生起は、理解が生じるか否かに掛かっており、多分に不確定的である。痙攣を神経障害の表れであるとも、相手が私に対する軽蔑を(無意識的に)表明したものであるとも、常にどちらとも解釈できるのである(伝達意図は無意識的なものかもしれないのだから、当人に問い尋ねてみても決着がつかうわけではない)。したがってコミュニケーションが生じているか否かについては、一義的に決定しがたい場合も多い(あるいはこの解釈=理解は、コミュニケーションという統一体=単位 Einheit がそもそも生じてくるための、不可欠な契機の一つである)。

しかし少なくとも、言語が用いられている場合には、そのような不確定性は、完全に消去されるわけではないにしても、大幅に減じられる。研究会の席で相手が私に向かって「君の議論は全部戯言だ」と言う。私としては、相手の発言は何らかの身体異常の結果として喉笛から漏れた音声がかたま

のような言葉の連なりに聞こえるかたちを取ったものであって、そこには何ら伝達意図などない、今の発話は相手の身体異常を示す（情報を与える）記号にすぎないのだと考える――したがってその発言を無視して他の参加者と議論を続ける――ことも、可能ではある。しかし通常の場合、そのような解釈を本気で実行することはきわめて困難だろう。単純な確率の問題としても、そんなことはまったく「ありそうにない」（蓋然性が低い）のである。したがって言語が用いられている場合にはコミュニケーションが（「情報／伝達」の差異が）生じていると、しかも何らかの接続への展望（「私の発声は、単なる身体的な出来事として無視されはしないだろう」との）を伴って為されていると、考えてよいのである。

マスメディアにおける複製技術の意味を、コミュニケーション一般におけるこの言語の働きと類比的に考えることができる。中世の書字工房での写本作成や、ライブないし講演会の場合、それらがなされている動機や目的は、純粋な情報伝達以外のものでありうる（神への奉仕ないし修行の一環、アーティストの自己表現、収益、政権獲得への準備、等）。しかし複製を可能にする多少とも大規模で精巧な機械装置を用いてコミュニケーションが増幅され流布される場合、少なくともそこには今述べたような動機に加えて、当該情報（メッセージ）を大規模に発信するという特別な意図（明示されていなくとも、そうなるという可能性）が加わってくる。大規模な機械装置を使って伝達を行っているからには（言うまでもなくそれはもはや、偶然的な出来事の結合による自然現象とは見なされえない）、情報内容とは、あるいは個々の話者の伝達意図とは別に、そのような伝達様式が用いられているということから自ずから生じる経緯の特徴があり、独自の論理がある、つまりは一つのシステムとしてのまとまりを有しているはずだと見なされざるをえない。

複製技術を用いた、マスメディアによるコミュニケーションは、そのことによって他の文脈からある程度切り離され、独自の論理に従って組織されていく。これはすなわち、一つの機能システムとして分出を遂げるということに他ならない。この分出したシステムを秩序づけるのはまずもって、他のシステムの場合と同様に、一つのコードである。それがここでは「情報／非情報」に相当する。このコードに従って組織されるコミュニケーション（マスメディアのコミュニケーション）ではとりあえず、「わざわざ複製技術を使って報道されるからには、その報道内容には情報価値があるはずだ」との想定に従って通用していく。ただしこれは、マスメディアが発信する事柄が常に情報価値を持つ（「スクープ」である）、というわけではない。肝心なのは、あらゆる発信内容が「情報／非情報」に従って評価される、という点なのである。したがって、非情報には何の意味もない、というわけではない。非情報が無ければ、それから区別される情報もありえないからだ。これは、科学において非真理が真理と同様に価値を持つのと並行的である。

このように考えるならば、本書「訳者解題」で述べられているような、ルーマンはマスメディアは「情報／非情報」のコードだけでは規定されえず、「複製技術による」という補足規定を必要とする¹と見なしているから、マスメディアを分出した機能システムとして扱うのは根本的な問題を孕んでいる（破綻している）云々という議論は、話の順序が逆転していることが明らかになる。ルーマンが本書の冒頭でこの技術による規定を持ち出しているにもかかわらず、以後の論述ではほとんどその点に触れられていないように見えるのは、この規定が、コミュニケーションにとっての言語がそうであるように、マスメディアのコミュニケーション領域全体を他領域から切り離す（後で触れるクライスト流の表現を借用すれば、「天国から閉め出して門をかける」）という意味を持っているからである。

本書での冒頭以降の論述は、閉め出された門の外での経緯についてのみなされていくのだから、締め出し作用そのものにはあえて触れる必要はないわけだ。

むろん言語および複製技術は、単にコミュニケーション一般を、またマスコミュニケーションを、他領域から切り離して自律させるという、形式的な作用を発揮するだけではなく、コミュニケーションの内実にも一定の影響を及ぼしていく。言語は何よりも、コミュニケーションの再帰化を、コミュニケーションについてのコミュニケーションを、容易にすると同時に不可避にもする。複製技術はコミュニケーションを対面的な相互行為から引き離すことによって、発信者の思い込みに基づくコミュニケーションを継続していくのを可能にする。少なくとも現在のところは、視聴率をリアルタイムで完全には計測できないがゆえ、常に「これならウケるだろう」という見込みで番組を製作していかねばならない。惨憺たる数字が上がってきたとしても、「もう少し続ければ視聴率もアップしていくはずだ」「今回のドラマはシリアスすぎて時流には乗れなかったけど、そのうち名作として再評価されるかもしれない」といった態度を取ることが可能なのである（本書 13-14=11）。ちなみにこのようなナルシスティックなコミュニケーションは、ネットの普及によっても拡大再生産されているように思われる。ネット住民たちが、批判やファクトチェックから目をそらして互いに「いいね」を付け合うというかたちで、である。その点ではネットとマスメディアはそれほど異なっていないと言えるのかもしれない。

しかし話を戻そう。天国から閉め出されたわれわれの前に広がる世界は広大である。この締め出しによって、マスメディアのコミュニケーションは個別的な背景的文脈から切り離され、「自由に浮動する」ことができるようになるからだ（あくまで「門の外」に限ってのことだが）。そして、締め出し＝離脱による諸可能性領域の開示（複雑性の縮減による複雑性の増大）が、再び秩序づけられる＝制限されるために用いられるのが「情報／非情報」という判別を可能にする「プログラム」である、というように本書の議論は展開されていく。この開示と再制限からマスメディアのどんな静態と動態が派生してくるか。これが本書全体にわたって論じられていくことになるのだが、ここではそのごく一部を示唆しておくことしかできない。

コミュニケーションが複製技術を介して営まれている場合、そこには、情報内容やそれと内在的に関連する伝達動機（この作品は美しい／多くの人に鑑賞してもらいたい、この情報は真理である／万人がそれを知るべきである、等）とは別に、それをわざわざ、一定の組織によって運用される複製装置に乗せて広めるだけの理由があるはずだと推測される。伝達される内容が美であることを、真理であることを、いくら強調しても、なぜそれをわざわざ報じるのかという疑念が別途生じてくるのである。したがってマスメディアは最初から、動機（というよりも、事は個人ではなく組織における意思決定に関わるのだから、「背景」とでも言うておくべきか）への疑いとともに関われていく。

……われわれはマスメディアに関してきわめて多くのことを知っているのだから、[マスメディアという] この情報源 (diesen Quellen) を信頼できはしない。 (S.9=7頁、訳文および下線部馬場)

邦訳では下線部が「その情報の出所」となっており、マスメディアによって流される情報がどこから得られたのかが疑わしい、という意味に解されているようだ（匿名掲示板でよく見られる、自分の意見に反する指摘に対して「ソース出せよ」「ソースまだあ？」と「反論」する書き込みのように）。

しかし「ソース」が明示されたとしても、あるいは情報内容が正しいということが明らかになったとしても、それで疑念が払拭されるわけではない。なぜ今それを、大規模装置を使って流布させるのか（アジェンダとしてセッティングされるのか）という疑念は常に提起可能だからだ。われわれが「きわめて多くのことを知っている」のはこの点に関して、つまりマスメディアには常に裏があるということについてなのであり、そこからは「なぜ今この番組・記事を？」という疑念がくり返し生じてくる。そしてその疑念は無限に増幅していく。後ほどコミュニケーション一般について述べるように、その種の疑念を抱かせることこそが、真に重大な問題から目をそらせるための陰謀の一環なのかもしれないという疑念を、重ね合わせることもできるからだ。だからこそ、情報操作を行っている者を、また誤情報の流布という罪を犯しトリックを仕掛けた犯人を、暴きさえすれば、操作された情報は通用しなくなるはずだとの前提を保持することはできなくなる。「誤情報／真なる情報」という区別自体が失効する。どちらも情報操作のために用いられうるからである。――件の前提は、18世紀のスリラー小説（本書10＝8）から⁵⁾今日の社会学者の研究に至るまで、常に保持され続けてきたのだが。マルクスの社会理論もニーチェの宗教批判もフロイトの精神分析も、経済的利害やルサンチマンや抑圧された欲望を「真の原因＝犯人」と見なす限りは、このプロットの枠内にある。もっとも、彼らの議論においては、暴露される事柄はもはや「真理」としての資格を失っている（にもかかわらず、あるいはまさにそれゆえに）有効であり続けるのだが（Luhmann 1970, 68）⁶⁾。

いずれにせよ機能分化した現代社会においては、もはや何らかの秘密を、具体的には隠された真の動機や原因を、暴露することによる無効化戦略は通用しなくなる。そこで何か（本書に即して言えば、マスメディアが発信する情報が）通用するのは、固有价值（Eigenwert）として、すなわちコミュニケーションが回帰的に関係し続ける中で一時的に生じる安定状態としてだけだからである。この点は、マスメディア研究で言う「第三者効果仮説」と「予言の自己成就」論を重ね合わせることによって明らかになる。

「A銀行が倒産する」という虚偽の情報が広く流布され、多くの預金者がそれを信じて取り付け騒ぎが起こり、実際にA銀行が倒産する――周知の「予言の自己成就」のプロセスである。実はこの情報は、A銀行の倒産を、とまでは言わないにしても業務妨害を狙ったライバル銀行による工作であり、それを仕掛けたのは某業界新聞の編集局長〇〇氏である、ということが明らかになる。それでこの情報は失効するだろうか？

そうなるとは限らない。ある預金者は考える。自分はこの情報の「ソース」を知っており、情報が虚偽であるにもかかわらずなぜそれが流布されたかも把握している。だから自分はこんな偽情報には踊らされない。しかし他の預金者は愚かだし、自分ほどメディア・リテラシーが高くないから、この情報を真に受けるに違いない。そうなれば取り付け騒ぎが起こり、A銀行は倒産する。そうなる前に自分の預金だけは引き出さなくては……。全員がそう考えて行動すれば、結果として、誰もがこのニュースがフェイクであることを知っているにもかかわらず、予言の自己成就が生じてしまうのである。肝心なのは、誰もがこの情報を知っている、と誰もが考えているという事実（それもまた、想定されたものにすぎないのだが）なのであって、情報の正しさや伝達動機の真正さなどではない。この事実の上に各人が行動を計画し、それらの行動が積み重なり相互に強化しあうことによって、もはや容易には覆しえない（その意味においては「安定した」）秩序が成立してくる。この秩序が「固有价值」と呼ばれるのである。

われわれは社会について、世界について知っていることを、マスメディアを通して知っている——本書はこう述べることによって開始される。しかし肝心なのはむしろ、誰もがそうしているということを知っている（と想定される）、という点なのである。マスメディアで報道された事柄は今や、誰によっても知られている、ということを知っている。少なくともそう想定し、それを前提に当方の行動戦略を組み立てることができるのである。「知らない」という相手に対しては、怠慢を、あるいは社会人としての常識の欠如を非難してもよい。有名な法格言に倣って言えば、「メディアノ不知ハコレヲ許サズ ignorantia medium neminem excusat」というわけだ。フェイクニュースをファクトチェックによって退ける場合でも、フェイクニュースが広く行き渡っているということが前提とされている以上、それは固有値としての意義を有しているのである。ファクトチェックが、固有値としてのフェイクニュースに対する有効な反撃手段であり、常に必要とされているのは、言うまでもない。しかしそこには二重の限界があることも指摘しておかねばならない。第一にファクトチェックが効力を発揮しうるのも、やはり実際にそれが報道され、人びとに知られることによってのみ、つまり自らが固有値となることによってのみである（本書S. 161 = 133-134頁）。第二に、ファクトチェックも複製技術を使って流布される以上、「なぜわざわざそんなことをするのか」という疑念につきまといわれざるをえない——「核ミサイルが飛んでくるかもしれないのに、『首相の発言のどこそこは事実ではない』などというトリヴィアルな指摘ばかりをくり返すのは、某新聞が反日メディアだからだ」云々。これはコミュニケーション一般において、「情報／伝達」の差異を解消しえない、あるいは無限に反復しうるのと同様である。現在のアメリカ大統領は、きわめて幼稚で短絡的な物言いをくり返している。そのような情報発信は、彼の、いわゆる「ネトウヨ的」な発想と動機に基づいている……というように、情報と伝達を区別して理解する。しかし次の瞬間に、実は彼は自分がネトウヨ的発想に基づいて短絡的発言をくり返す人間だ、次に何を言うか見当もつかない、と思わせておいて（そのような情報を発信しておいて）、その裏で緻密な政治戦略を実行しようとしているのかもしれないとの疑問が湧いてくる。「デタラメ発言＝情報／ネトウヨ的発想＝伝達」ではなく、「ネトウヨ発想によるデタラメ発言＝情報／偽装による戦略上のフリーハンドの保持＝伝達動機」かもしれないのだ。しかしまた、そのように裏があると思わせることこそが発信したい情報であって、その裏には自分を大きく見せたいという虚栄心しかない、とも考えられる。しかしまた……（以下同様）。コミュニケーションをいったん理解する（情報と伝達を区別し、二つの相の差異において捉える）ことを始めたが最後、この無限遡行の可能性から逃れることはできない。やや長くなるが、ルーマン自身の論述を引用しておこう。

差異と選択に定位するコミュニケーション概念によって、コミュニケーションに関わる行動が孕む問題と制限とが了解可能になる（それらは、数世紀にわたって観察され記述されてきたものではあるが）。一度コミュニケーションに巻き込まれれば、単純な魂の楽園には二度と戻れなくなる（クライストが希望をかけたように、裏口を通ろうとしても駄目である*）。この事態は典型的には、（近代にとって初めて現時的なものとなった）誠実さというテーマに即して呈示されてきた。誠実さはコミュニケーション不可能である。誠実さはコミュニケーションを通して不誠実になるからである。コミュニケーションは情報と伝達の差異を、また両者がともに偶発的であることを、前提とする。だから自分自身について何事かを伝達することもまったく可能ではある。自身の状態、気分、態度、意図についてである。しかしその時、自分自身を、他でもありえたかもしれない情報の文脈として呈示していることになる〔——自分は今、真剣な態度で「こ

の本に書かれていることは全部戯言だ」と発言した。しかし自分の気分が変われば別のことを言うかもしれない、だから今言ったことは誠実な発言として真面目に受け取ってもらわない、というように)。このようにコミュニケーションはすべてを掘り崩す、普遍的で除去不可能な疑念を呼び起こしてしまう。有め鎮めようとすればするほど、疑念を再発生させることにしかならない。全体社会システムが分出の度合いを次第に高めて行き、〔このシステムを形成する〕コミュニケーションの独自性をますます反省するようになるとともにこのテーマが重要になっていくという事態も、今述べたことから説明できる。誠実さの不誠実さは全体社会が、自然＝本性の秩序によってではなく、コミュニケーションによって取りまとめられる何ものかとして経験されるや否や、テーマとなるのである。(Luhmann 1984, 207 = 上 203-204)

* 「このようなやりそこないは#」と、〔人形使いの〕彼は少し間をおきながらつけ加えました。「私たち人間が知恵の木の実を食べてからというもの、避けられなくなっているのです。それなのに楽園は門がかけられてしまい、^{ケルビム}知天使は私たちが追い出してそこにごんばっています。私たちは世界をひとめぐりして、もしかしたらどこか裏のあたりにでも門が再び開かれていないかと、調べてみなければなりませんですよ」(ハインリヒ・フォン・クライスト「人形芝居について」(種村季弘編訳『書物の王国7 人形』, 国書刊行会, 1997年, 206頁)。#人間の踊り手が自身の身体の動きを意識することによって生じさせる、不自然さを指す。それに対して人形は自分を意識的に飾ろうとなどしないから、踊り手としてはむしろ優れている云々。

5. 結語

本稿を閉じる前に、失楽園についての補論を差し挟んでおこう。それは本書のタイトル『マスメディアのリアリティ』とも関わってくるからである。ルーマンは何か所かで、失楽園のプロットに関する次のような解釈に言及している(Luhmann 1997, 574 = 2019-1, 650 など)。アダムとイブはエデンの園から追放され、地上で労苦を伴う労働によって自分たちを養っていかなばならなくなった。しかしその結果最後には人間は、楽園で安逸をむさぼる以上の幸福で充実した生活を実現することになった。かの出来事は、人間をより向上させるべく神意によって仕組まれた、善き罠だったのである云々(ある意味ではヘーゲルの「主と奴の弁証法」は、この解釈の焼き直しである)。

コミュニケーションの圏域に入ることによって、われわれはもはや単純な「真なる情報」に安住することはできなくなる。真と善(と美)は分離する。真理であってもそれをわざわざ伝達するのは、まったく邪悪な意図に基づいてのことかもしれないからだ。「このコミュニケーションは邪悪な意図に(ルサンチマンに、無意識の性欲に、階級的利害に)基づいている」という系譜学的・精神分析的・マルクス主義的「真理」に関しても、同じことが言える。「同じことが言える」という(「ルーマン主義」的な)「真理」に関しても……(以下同様)。しかし逆に言えばこれは、コミュニケーションが現に生じている(伝達がなされている)という事実は、情報内容の真理性によって保証される必要はない、ということでもある。真であれ非真であれ、その情報が複製技術を介して広く伝達され、人々に知られているという事実は変わらない。あるいはその事実は、偽情報によっても創り出される——ルサンチマンに基づいて活動してきた宗教がはるか現在に至るまで巨大組織を維持し続けているという事実が、また偽情報を伝達しているマスメディアが巨大産業として存在し現に活動しているという

事実が、である。それはちょうど、デカルト的懐疑に対するデカルト自身による論駁と同様である――妄想であれ悪魔によって誘発された幻想であれ、私が何かを考えているということが私の（思考の）現実存在を確証する、と。

〔自己言及と二分図式化の関係に関する〕第一の最も初期の事例は、思考の自己確認、すなわちデカルトの「我思う、ゆえに我在り(cogito ergo sum)」である。この議論は、（最広義の）思考の事実性の経験を引き合いに出し、それによって思考内容が真であるか否かという問いから独立する。思考は、正しい観念を用いても誤った観念を用いても、自己を確認できる。思考そのものは、ただ作動する意識として進行するがぎり、いかなる場合でも自己を主張する。それとともに、自己言及と真ないし偽としての認識の二項的構成が分離され、それまで以上に引き離される。（Luhmann 1981, 304 = 282-283, 訳文一部馬場修正）

複製技術の使用も、マスメディアが同様の道筋で自己を確証する契機となる。情報内容が真であろうが非真であろうが、複製技術を用いて現に伝達されているという事実は、多くの心理システムや、使用され消費される資源やエネルギーを巻き込みつつ、現に生じている。むしろ報道内容が真であるとは限らないからこそ、それが通用するのは複製技術を用いた伝達の作動による（つまり、マスメディアが実際に作動している）ということが確認できるのである。この意味で

それ〔＝マスメディア〕は、自分自身を〔、何ら作為を加えずに事態を「ありのままに」写し取っているという意味で、〕単純に真理であると見なすことができない――さしあたりそこに〔自身の作動がリアルに生じているということの〕保証が十分に存している。

Sie können, *und darin liegt zunächst einmal Garantie genug*, nicht einfach sich selber für die Wahrheit halten.

（本書 16-17=12, 斜体馬場）＊

＊斜体部分、邦訳では「それは自分自身さえも真実と受け止めることができないのである。そのことにまずは間違いない」となっている。筆者にはこの訳文は意味不明である。なぜわざわざ斜体部＝下線部のような一句を挿入しなければならないのだろうか？

マスメディアは真なる情報によって、あるいは偽情報によって、人々によって広く受け入れられている（と想定されている）リアリティを構成する。同時に、この（場合によってはフェイクな）「疑似環境」を構成するという働きにおいて、リアリティである。この二重のリアリティ（の分離状態）こそが、本書のタイトル『マスメディアのリアリティ』によって指し示されている事態なのである。そしてリアリティの構成をこの二重の相において、すなわち構成されるリアリティと構成する事実的な作動という二重性において考える立場こそが、ルーマンが言う「作動的構成主義」に他ならない。

その点を踏まえて先に述べた、「ファクトチェックの限界」についての指摘を再確認しておこう。ファクトチェックによって、某政治家の述べていることが虚偽ないし妄想であることを指摘する――これは、マスメディアの送り手にも受け手にも常に必要な「批判」の、あるいは以前に流行した語を用いるならば、一種の「脱構築」の作業である。この作業の重要性についてはもはや強調するまでもない。しかし、脱構築によって情報内容の非真性（虚偽であること、あるいは虚偽ではないにしても両義性と確定不能性を含んでいること）を指摘するだけでは、フェイクニュースが現に流通している

という事態を消去することはできない。「かつての日本は〈江戸しぐさ〉に見られるような優しく美しい国だった。美しい日本を取り戻そう」などという妄想に基づいた呼びかけを「脱構築」するだけでは、その効力を無効にはできない（かもしれない）のである。馬場 2015 でも指摘しておいたように、必要なのは「脱構築」ではなく、先のような妄想とは異なる声を実際に響かせ、決定不能性の空間を事実として出現させることなのである。

前回の米大統領選（2016年）で民主党大統領候補だったバーニー・サンダース上院議員は、トランプが就任した後で、こう発言した。「我々は巨大な問題に直面している。妄想を抱く大統領がいることだ」（朝日新聞2017年1月28日朝刊）。しかしトランプの存在自体は妄想ではない。トランプの発言が妄想であることを見抜けば、トランプ自身が真昼の幽霊のように消え去ってしまう、というわけではないのである。

以上の議論からの帰結を次のように要約しておこう。マスメディアは、失樂園によってわれわれが追放された先を、つまりコミュニケーションによって開示される無限空間を、全体社会の水準において言わば拡大表示する役割を果たす。失樂園は言語の使用とともに生じた事柄であり、活版印刷術の発明によってさらに徹底されることになった。

文字によって初めて、伝達と情報との明確な差異が強いられる。そして活版印刷術はさらにもう一段、伝達を特別に準備することから生じる疑念を強めることになる。それは独自の動機に従ってなされているのであって、情報の下僕として働いているわけではないのでは、と。文字と活版印刷術によって初めて、伝達と情報の一体性＝統一性ではなく両者の差異に反応するコミュニケーション過程を継続していくという発想が、生じてくる。この過程は、疑念を精神分析的かつ／あるいはイデオロギー（批判）的な方向へと継続的に普遍化しつつ、真理をコントロールし、疑念を分節化＝明確化していく過程なのである。（Luhmann 1984, 223-224 = 2020, 220）

大規模装置による複製技術の使用というさらに「特別な準備」に基づくコミュニケーションは、すなわちマスメディア・システムは、この疑念を再度もう一段強めることになる。われわれはマスメディアへの疑念をいかなる手立てを用いても払拭できないし、また疑念を抱きつつ（ファクトチェックなどを行いつつ）、高度な情報リテラシーを駆使しつつマスメディアに接しているからといって、そこから距離を取ることなどできないのである。

逆に言えばマスメディアは決して、諸機能システムの上位に位置しつつ統制を加えたり、共通の基盤を提供したりするわけではない。マスメディアが提供する情報は、常に疑いの余地を孕みつつも、現に流通しているという事実において以後のコミュニケーションの足場となる。各機能システムは、それを踏まえつつ、それぞれ独自の編成様式（コードとプログラム、テーマの歴史等）を駆使して独自のコミュニケーション連鎖を接続していける⁷⁾。これはすなわち、マスメディアが提供する諸情報をルーズなカップリングとして扱い、それを独自のかたちでタイトなカップリングへとまとめ上げることができるということ、言い換えれば情報をメディアとして形式を確立しようということに他ならない。マスメディアは、この意味においても「メディア」なのである⁸⁾。われわれが、ルーマンのメディア概念は「メディア／形式」の区別というかたちで一貫して解釈できると述べたのは、それゆえにであった。

〈注〉

- 1) これはメディア概念のみならず、ルーマンが用いる種々の概念・論点に関しても成り立つ。例えば、前期における「複雑性の縮減」の、中期以降における「オートポイエーシス」ないし「閉鎖性」による再構成に関しても、である。したがって筆者は、ルーマン理論の形成史における「オートポイエティック・ターン」や（前期／中期／後期の齟齬、という意味での）「ルーマン問題」など存在しない、ルーマンの生涯にわたる諸著作は一貫した観点の下で読解できるという立場を取る。無論これはあらかじめ証明される事柄ではなく、初期の著作をも後期の観点から読むことで初めて、その「可能性の中心」に到達できるとの想定にすぎない。
- 2) 「複製の」という限定が付されているがゆえに、電話によるコミュニケーションは、伝達において機械的・技術的手段が用いられているにもかかわらず、マスメディアからは除外される。電子メールも同様であるが、SNSなどの場合は宛先が限定されていると同時に「拡散」をも前提として発信されるわけだから、半ばマスメディアの性格を有しているように思われる。このような可能性を視野に収めていないという点で、ルーマンの議論は確かに「時代遅れ」ではある。
- 3) あらかじめ注意しておこう。われわれは、言語によって初めてコミュニケーション・システムが分出すると、つまりコミュニケーションは言語によって「明確化されることを必要としているのだ」（本書「訳者解説」186頁）などと主張するつもりはない。言語なしでもコミュニケーションは生じうる。しかし言語が用いられている場合には、（分出した）コミュニケーション（・システム）が必然的に生じていると見なさざるをえない。マスメディアにとっての複製技術についても、同じことが言える。この点については後でまた論じる。
- 4) 「情報／伝達」の区別は理解によって成立するが、理解は「情報／伝達」が区別されることを前提とする。この循環関係が、コミュニケーションにおける「基本的自己言及」（要素＝統一体 Einheit の構成の水準での自己言及）と呼ばれる。コミュニケーションの自己言及性は、この水準においてすでに成り立っているのであって、「ある発話の意味は、前後の発話を参照しなければ確定できないし、前後の発話についても同じことが言える」という、前後関係における「閉じえぬ言及の環」（佐藤 2008）において初めて生じるというわけではない。こちらは基本的自己言及を踏まえた上で成り立つ、「過程的自己言及」と呼ばれる。
- 5) 英国を中心に発展した、怪奇趣味に基づく「ゴシック小説」と呼ばれるジャンルを指す（メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』（1819）はその系譜に連なる）。ここでルーマンが念頭に置いているのは、「隠蔽された罪を暴く」ことをプロットの軸に置いて、推理小説の原型とも呼ばれることになった、ウィリアム・ゴドウィン『ケイレブ・ウィリアムズ』（Things As They Are; or The Adventures of Caleb Williams）（1794）（岡照雄訳、国書刊行会）などであろう。
- 6) フロイトの昇華の理論は昇華の産物である、マルクスのイデオロギー概念は、彼自身の階級的利害関心に基くイデオロギーである云々。彼らの議論はこの種の自己言及的な批判によって失効することはない。彼らの言説はまさにそのようなものとして提起されているのだから。問題は当該言説が「真理」であることではなく、クライアントを治療し階級闘争を前進させるという、言説が持つ物質的な効果なのである。
- 7) 本書第6章で取り上げられている。1994年のブラジル大統領選挙において生じたリクベロ・スキヤンダルはその事例の一つである。そこでは、マスメディアによって偶然暴露された、政治家の邪な本音（今回の通貨改革は、経済的な理由からではなく、次回大統領選のために行われたものだ云々）に関する情報は、かの地の政治システムの独特のローカルな構造（政治システムの補役割 Komplementärrollen としての有権者役割の分出が、すなわち関与者の政治システムへの疎外が、十分に生じていなかったこと）のゆえに、選挙結果を左右しなかったのである。
- 8) ただしマスメディアは、混沌とした経済現象、政治的イベント、日々の出来事などを、一定の選択基準（選択機構 Selektoren—翻訳では「選択杖」だが、不適切だろう）に従って、またスキーマとスクリプトを駆使して（本書第15章）、報道内容へとまとめ上げる（広告やエンタメの場合も事は変わらない）。その点ではマスメディアは、自身の型に填められたタイトなカップリングを実現する。すなわち、諸機能システムの作動というメディアに対する形式として働くのである。この点でも、西垣＝大黒流の、マスメディア特権論（マスメディアはそれ自体として、全体社会の唯一のメディアである云々）は不適切である。

〈参考文献〉

- 馬場靖雄 2015, 「ドゥルシラ・コーネル『自由の道徳的イメージ』書評」, 図書新聞 3232 号
- 大黒彦彦, 2006, 『〈メディア〉の哲学—ルーマン社会システム論の射程と限界』, 東京, NTT 出版
- Luhmann, Niklas, 1968. *Soziologische Aufklärung*, Opladen, Westdeutscher
- , 1981. *Gesellschaftsstruktur und Semantik 1*, 1981, Frankfurt, Suhrkamp, = 徳安彰訳『社会構造とゼマンティック 1』, 東京, 法政大学出版局
- 1984. *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt, Suhrkamp = 2020, 馬場靖雄訳『社

- 会システムー或る普遍的理論の^{グレントリス}要綱』(上・下), 東京, 勁草書房
- 1996, *Die Realität der Massenmedien*, Opladen, Westdeutscher=林香里訳『マスメディアのリアリティ』, 東京, 木鐸社
- 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt, Suhrkamp= 2009, 馬場靖雄/赤堀三郎/菅原謙/高橋徹訳『社会の社会』1,2, 東京, 法政大学出版局
- 西垣通, 2004, 『基礎情報学ー生命から社会へ』, 東京, NTT 出版
- 佐藤俊樹, 2008, 『意味とシステムールーマンをめぐる理論社会学的探究』, 東京, 勁草書房
- Spencer-Brown, G. 1969, *Laws of Form*, London, George Allen & Unwin=1987, 大澤真幸/宮台真司訳『形式の法則』, 東京, 朝日出版社

Mass-media as an Autopoietic System

BABA, Yasuo

In this paper we analyze, based on Niklas Luhmann's social systems theory, the present condition of mass media and its emerging transformation by rapid progress and spread of IT. According to this theory, mass media should be grasped as an autopoietic (closed, self-referential) communication system. This theory is often criticized, because it seems to emphasize the autonomy of mass media too much, disregards relation between mass media and total society (Gesellschaft), and exempts this system from the social responsibility. As a matter of fact, however, Luhmann's mass media theory has a great advantage, because this theory focuses on the contingency and uncertainty which is inherent in mass media system. This problem becomes clearer by so-called IT revolution in mass media and our everyday life.

Key words : Mass Media, functional Differentiation, Autopoiesis, communication